

くろつけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十五年十二月一日発行(毎月一回一日発行)
第二十卷八号(通卷第二三六号)

鈴



くろつけ

俳句雑誌

GLOCKE

第 236 号

12. 2013

水晶魚

品川鈴子

詩の国に老いを養ふ温め鳥

文革新に飢ゑし子育て寒九鳥

紫のフェルト帽斜に北京刀自

帰国ハグ霜焼膨れの手は柔らか



老公^{マンシヨ}寓^ンペチカの陰に火消壺

三里の壺に寒灸据ゑつこお幼友

歸国子に着す縮緬のちやんちやんこ

温突^{おんど}の国へと余生戻り航く

へつつひに鮫鱈鍋を煮零せし

水晶魚観音山の裾ひらめき



玉鈴

吟

愛媛 松井洋子

御杣山ぬけて五十鈴の水の秋
み空仰ぐ千木の雄雄しく御遷宮
青嵐九度山の道風起す
牛蛙高野の池に鳴き交す
初秋の橋杭岩の影黒し

埼玉 松本清川

どぶ川に鯉躍りゐる今潮の秋
戸袋に雨戸を練れば守宮出づ
秋暑し駕籠を吊りおく長屋門
終日をごろ寝で過す炎暑かな
街はづれ舗装道路を過ぎる蛇

兵庫 松村晋

頼まれて友の厨の南瓜切る
千日草くれて去り行く友の背
茄子の花叔母はひねもす鋏を持ち
新涼や抱かせて貰ふ知らぬ嬰
ひたすらにイラストパズル解く夜長

東京 松本アイ

原爆忌福島基金へ貧者の一灯
夏の風邪素頓狂な経をあぐ
昼寝覚宴の続き何処やら
鬼灯の朱に誘われ今日命日
屋の雷陽のさしながら豪雨来る

愛媛 松本恒子

八十路とて会へば青春鳳仙花
こただけに戦残れり破れ蓮
空池からいみに雨満たされて月浮かぶ
コスモス活けホスピス棟に愛残し
鐘一つ撞きて秋風広げけり

愛媛 三浦澄江

稲みのる近づく程に風のあり
日射病くぐり抜け来て米をとぐ
余生なほときめきもあり篝火草
親の年越えて父母恋ふ一つ星
曼珠沙華咲ききはまりて白き花

兵庫 三枝邦光

良夜かな海に影おく大鳥居
揚浜の塩の枝豆能登の旅
喪の家へつづく小径やこぼれ萩
黒塀を叩く野分や西の京
水澄むや鞍馬も上の洗堰

兵庫 水野 範子

青瓢ひょう括れ美しきを誉め予約
大出水滝と見まがふ五十段
牧開けセピアサイロの草の花
肌掛は団子となりし熱帯夜
暴風に片手飛ばさる老案山子

兵庫 水野 弘

大根播く白く太りし夢を見る
孫娘誘われ食事敬老日
教え子と膝つきあわすピヤホール
仏壇に妣の好みの西瓜挙げ
里帰り野山の錦友はいず

香川 三橋 早苗

練乳がけ虫歯にしみるかき水
ロケットは飛ばず辺りに蝉の声
秋冷の手術台へと段上る
入院の長き夜ばかり迎へたる
退院すまづ風鈴を片付けて

茨城 三輪慶子

秋じめり皺おさへつつ寄席出づる
二百十日衝動買ひの漆椀
厄日無事オリンピックの本決まり
指先で回す地球儀秋じめり
物知りの祖母の声する曼珠沙華

埼玉 向江 醇子

片陰が途切れても尚歩かねば
夏盛りダム呑むダムの記事のあり
子供プール垣根に干され午後静か
屍の役で重なり汗匂ふ
近づけば我が家もさんまの香が漏れる

兵庫 村田とくみ

泥洗ふそばから香り新牛蒡
職退きし叔父サンガラスにハンティング
堆き芥をするつと白とかげ
炎昼を戻る舗装路サウナ風呂
生き返る心地よ夕立あとの風

大阪 師岡 洋子

身に入むや白布で覆ふ未完の絵
秋天へ死者の茶碗を割りし音
ふるさとは水の秋なり子と歩む
湖見ゆる高さに巻いて秋すだれ
菜虫とる眉間の皺を深くして

東京 安田とし子

亡き夫と旅のいく度鳥渡る
多摩の端の空は清朗墓洗ふ
飴なめて昔が恋し鳳仙花
赤蜻蛉手はゲー・パーにウオーキング
野に抓みし芒を供へ月祀る

大阪 吉田光子

秋の虹谷二つ越え橋わたす
竜淵に潜む山の湯夜の湯あみ
星月夜家族ひと部屋いで湯宿
どちらやら三重・滋賀県境霧下りる
鎌岳も誓子の句碑も霧襖

兵庫 明石文字

法師蟬東京五輪に生れ来よ
山麓に泉噴き出す羊蹄山
末弟に訃報つづけり秋彼岸
夢十夜するすると延び百合開く
家計簿の辻棲合はぬ秋夜長

愛媛 足利罇子

別れ句座遺影に菊を飾りたる
月夜蟹重さ程には身入りなし
ピーマンも佃煮にして箸休め
白き歯を太陽に向け甲子園
豪雨去り季節も変る敬老日

兵庫 荒木治代

小流れの底まで透けて木曾晩夏
鉢巻の気合に西瓜真つ二つ
子はあてになるかならぬか盆の月
そこまてと言ひて駄まで月の道
雨止んでえのころ草に風柔し

兵庫 荒木 稔

雲水の行くに纏はる赤とんぼ
炭坑節は遠き唄とも盆の月
石積んで田の神送る赤まんま
源流は行者の峰や水澄めり
なほ縷々と露地口あたり残る虫

大阪 居内真澄

秋の蚊の尻重たくて叩かれず
植木屋は百日紅から枝払ひ
教へ子の便り跡切れて敬老日
台風は我が地を避けて駆け抜ける
校庭の部活静まり満月出ず

大阪 池田かよ

絹糸のもつれや烏瓜の花
コスモスの咲くその家へ嫁探し
組紐のゆるりほどけて穴まどひ
かなかなと啼いて夕陽を落しけり
文化祭一作品に黒リボン

兵庫 池田久恵

門くぐり玄関までの蟬の声
朝曇り風あるうちに犬散歩
虫の声犬としゃがみて耳すます
初生りは驚き黄色ミニトマト
梨の皮ぷつぷつ切れて話しおり

大阪 石橋萬里

河馬ほどの欠伸大暑の塾帰り
帰省子の生返事して眠りこけ
踊り下駄片方脱げしまま跳ねる
古書街をぶつかりながら鬼やんま
アンコールに応ふ指揮棒汗飛ばす

兵庫 市橋香

彼岸花彼岸忘れず咲き揃ひ
人止めし柵の向かうの葛の花
細筆のすべる墨色夜の秋
敬老日高山名酒名菓かな
秋暑し観覧車にも人見えず

愛媛 伊藤マサ子

東京にきまりし五輪今朝の秋
置葉もらふ富山の花茗荷
死にまねの蟬に逃げらる過去未来
ハンケチの兎も跳ねる後の月
薄山四阿ありて将棋指す

大阪 井上あき子

もの言わぬひと日の暮れて酔芙蓉
赤とんぼいつしか消えて故郷は
パソコンの魔性に憑かれ長き夜
丁髷の未だ間に合わぬ秋相撲
塩飴をかりかりと噛む秋天下

兵庫 井上加世子

芋虫ののたりと寝たる石畳
講演の原稿を練る蝉しぐれ
つり皮でおはぐるとんぼ通夜の旅
喜寿の秋同級会を終了す
台風の窓細くあけ生徒待つ

愛媛 今井忍

港まできて荒れ神輿島を出ず
献燈に灯の入る参道宵祭
近道を急ぐ乱れ萩跨ぎつつ
犬と子の走る段畑雲
一筆箋見舞ふ秋果の籠の中

兵庫 岩木眞澄

川ふたつ出合ふ深みも秋の水
父の忌や新酒注ぎぬ盆栽に
名月や転た寝の夫も連れ出して
メモしたる用成し終へて良夜かな
天高し式年遷宮佳境なる

鈴の奏

品川鈴子選

原発の廢墟さながら蟻地獄
兵庫 吉田耕人

宰相は戦を知らず広島忌

終戦日勅語に哭きし父のこと

臥す妻の愚痴を聞きやる星月夜

抹茶碗泡に射し込む月青し

躍り口さきに這入りし月明り

街角に塾生勧誘秋学期

黒猫の毛並を照らす望の月

新米のおにぎり水を控えすぎ

青天の運動会に出てみたり

吾亦紅指はじきつつ山歩き

人目など気にするものぞ草の花

須磨関の売り声媼秋なすび

秋天の鉄拐が峰『笈小文』

須磨寺で浴びる香煙野分どき

一の谷風坂落し浜の秋

新涼や家中の靴磨きあげ

手をとりにて親子で迎ふ敬老日

兵庫

吉田耕人

兵庫

坊野貴代美

香川

吉井 潤

兵庫

木本 彦

大阪

宮村フトミ

星一つ流れとどまり城の空

電子音吾を呼びたる文化の日

きつぱりと秋が来村に嫁が来る

玄関へどさりと届く今年米

引揚げ者なりし友の計黍嵐

野分中洋犬の顔尖りたる

兵の駆けし播磨路野菊晴

老い猫の甘え寄り来る秋の夜

少々のことは許せりねこじやらし

置き葉減りて買ひ足す菊日和

家紋入りの盆提灯を飾る兄

安倍夫人の講演を聞く真夏日に

秋うらら目薬二本注し忘れ

“百日紅”いつも下だけ見てる吾

色付いた風船蔓風にゆれ

雨さけて蟻螂壁にへばり付く

来年は経費詰ると敬老会

京出水片づけ忙しみやげ店

高知

田村 嘉章

兵庫

上田 雪夫

神奈川

山本久美子

兵庫

伊藤 公女

秀 鈴 記

終戦日勅語に哭きし父のこと

吉田 耕人

終戦の玉音放送を聞いたおりの日本国民の驚きは、多感な子供にとつて強烈な印象として生涯忘れることができな
い。当時の父親は強くて頼もしい存在だったのに、傍目も
構わず声を上げて泣き崩れた。その訳を考え続けた戦後つ
子の私たち。答えは未だに確かなものを得られずにいる。
あのような時代は二度とごめんです。

囀り口さきに這入りし月明り

坊野貴代美

茶室の用意も万事整う折から、待つていたように明る
い月が射しこむ囀り口。月光に誘われて静かに始まる茶事
の楽しさ。

吾亦紅指はじきつつ山歩き

吉井 潤

吾亦紅は楕円球形の暗紅紫色の穂状花で、花と言つても
桑の実に似て、野趣に富んだ個性的な植物。それはよほど

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十句 永塚 尚代 評

*選句は全て 品川鈴子

大きくならないと木とは言えず、だからと言つて草に分け
るほど繊細でもない。寄り添つたり巻きついたりせず自立
している。吾亦紅に触れずにおられないほど親しみと愛着
を覚える作者もきつと多面性を持った俳人に違いない。ど
ちらかと言えば吾亦紅は謙遜したような使い方が多いが、
植物の季語の中では一、二に挙げたいほどの存在感。

須磨寺で浴びる香煙野分どき

木本 彦

須磨寺は神戸市須磨区にある真言宗・須磨寺派の大本山
で、平安時代の初めからあるという古刹。平敦盛遺愛の青
葉の笛や弁慶の鐘、源義経腰掛の松など宝物や史跡が多
く、境内には芭蕉や子規の句碑もあるとか。台風風の風にな
づられながら香煙を浴びて、息災を祈つておられる様子が
分かる。

新涼や家中の靴磨きあげ

宮村フトミ

酷暑の間は家事も必要なことのみにして…と体第一に考

えておられた作者。涼風の吹き始める頃には、家族思いで働き者の主婦に戻って、下駄箱の靴をすっかり磨き上げたと言いでおられる。又元気に動けることへの喜びと一仕事終えた満足感が読みとれる。

引揚げ者なりし友の訃黍嵐

田村 嘉章

御友人の訃報にあつて、心をこめて悼んでおられる。その方は先の大戦の後、外地から引き揚げてこられた。広大な高粱畑が広がっていたという満州の風景を、いつも偲んでおられたのかもしれない。黍畑を揺らす大風に、作者は御友人の戦後の苦勞や望郷の念を思いやっておられる。

置き薬減りて買い足す菊日和

上田 雪夫

どの家にもいくつかの常備薬があり、お医者にかかるといってもない町は重宝なもの、少しずつ使っている間に減った薬を買い足すとき、大病もせずに暮らしてこられたことのあるがたさを再認識することが多い。菊日和の季語がそれを伝える。何事もない平穏な日々の大切さを感じる句。

安倍夫人の講演を聞く真夏日に

山本久美子

安倍首相夫人の昭恵さんは一風変わったファーストレ

ディで、「私は家庭内野党」と発言してメディアを賑わした。原発反対を表明し、首相の原発トップセールスに心が痛むと言われたとか。正直で率直なお人柄なのだろう。その昭恵夫人の講演会に、真夏日にもかかわらず行かれたという句。どんなお話だったのか大いに興味がわく。

京出水片づけ忙しみやげ店

伊藤 公女

この秋、京都の保津川が氾濫して風光明媚な嵐山のあたりが水につかった映像は記憶に新しいし自然災件がいったん起これば、平常の暮らしは根こそぎ覆されてしまう。京都に行かれた作者は、片付けに忙しいみやげ物屋に同情の目を向けておられる。

庭すつと跡取りらしき蜥蜴の子

西田 敏之

部屋でくつろぎながら庭の方を見やると、蜥蜴が横切つて行つた。時々見かける蜥蜴よりずいぶん小ぶりのようだから、あれは跡取りだと微笑みながら見ておられる。小さな生き物への自然な愛情を感じとれる句。